# 2025 年度プロジェクト活動報告：The Art of Listening

■プロジェクト代表：金山智子
分担者：松井茂・吉田茂樹
履修生：（M1）岩崎李音、小林一誠、鈴木光泰、新延まこ都、村上萌
（M2）牛尾日莉、早田仁知、髙岸航平
（客員研究員）リャオ・クリスティーン

■研究概要

普段私たちは「きくこと」をどれほど意識しているのだろうか。「きくこと」は人と人とが関係する全ての営みの土台である。そして、「きくこと」は私たちの研究や表現活動において重要なものである。個人のナラティブから公人のインタビューまで、リサーチャー、フィールドワーカー、アーティスト、アーキヴィスト、エンジニアなどが、「きくこと」を実践している。一方、「語り」は、語り手と聞き手の相互行為による共同生成でありながら「語り」にばかりに注目が集まり、「きくこと」に対してほとんど議論されていない。「きくこと」は受動的あるいは自発的な行為と考えられており、過去や現在に関わる行為と捉えられがちである。このような背景から、本プロジェクトでは「きくこと」を表現技法として位置づけ、その方法論や実践、哲学的意義にアプローチすることを通じて能動的で未来に続く創造的な行為として考えていくことを目的としている。

本プロジェクトは以下の三つを基本的な柱と活動をしている。

（1）「きくこと」に関する理論や方法論、文献、作品をもとに議論
（2）「きくこと」の実践者へのインタビュー
（3）「きくこと」に関連した研究や表現の実践

■活動内容

最終年度となる 2025 年度（本年）は、教員としては総括を意識して活動を行なったが、本年から参加している修士 1 年生にとっては、例年同様、各自の関心をもとに「きく」取り組みを企画し実践した。

今年度は物理的な場でのコミュニケーションや対面によるコミュニケーションに関心のある学生が多かった。物理的な時空間や質感を伴うものに関心のある学生が年々増えているが、今年度の学生にも同様の傾向がみられた。具体的に実施した活動とし

ては、まず、坐禅という時空間、みかんという物質、同じ時間に録る音など、モノやコトなどを介して「きくこと」を体験するといった多様な実践が行われている。

7 月のオープンハウスでは、昨年実施した「顔なしフォン問答」のテーマを継承しつつ、面識のない人とのコミュニケーションすることで「きくこと」の難しさや面白さなどを体験した。さらに、今回はその相手とのコミュニケーションをもとに、新たな表現を創造することについても検討した。

後期は、メンバーの関心や研究に紐づけながら、以下のようなさまざまな活動を通して「きくこと」を実践し、考察を深めた。詳細は以下のとおり。

■活動報告

1. 「黒電話」（IAMAS Open House 2025, 7 月）
2. 「弓指寛治　不成者（ならずもの）：現代アートが描く義勇軍」（内原郷土史義勇軍資料館展示およびトークイベント, 8 月）
3. 気く 坐禅会（11 月）
4. ハピラジ（いぶき福祉会, 9 月～2026 年 3 月）
5. KANJI YUMISASHI GALLERY 展示＆インタビュー(昭島市立光華小学校, 11 月)
6. みかん物々交換 （IAMAS, 12 月）
7. 「22 時、なにしてる？」（IAMAS, 12 月）

いずれも、身体を介したコミュニケーションを中心とした活動が多く、多様な表現形態を通して、きくことは身体的コミュニケーションであることを認識する機会となった。

また本プロジェクトの 3 年間の活動の総括として、以下に二つにまとめた。

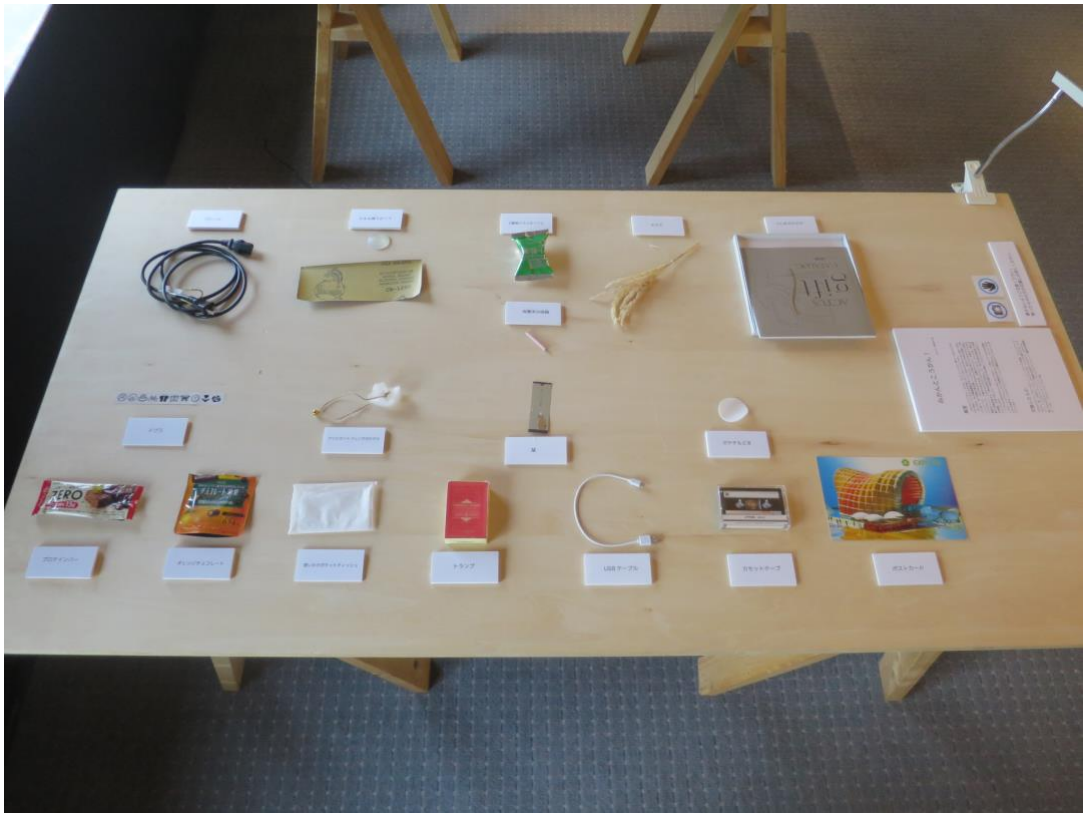
1. 『「聴く」という自己変革：The Art of Listening(AOL)プロジェクトの 3 年間を振り返る』（エッセイ集）
2. 「The Art of Listening Project　－3 年間の活動報告」（情報科学芸術大学院大学紀要 Vol.17 2025）

■活動の様子

◇気く　坐禅（@Ogaki Mini Maker Fair）◇

企画運営：小林一誠

◇IAMAS2026 プロジェクト展示



エッセイ集『「聴く」という自己変革：The Art of Listening(AOL)プロジェクトの 3 年間を振り返る』（表紙）